

アユ釣りから学んだこと

アユ釣りはほとんどやらなかったのですが、地元の汚れた川・石津川にアユを取り戻そうという活動に関わってからアユに関する情報入手という目的もあって、少し気合を入れてやるようになりました。やってみると引き味も周囲の景色も抜群、しかも食味は良しで、すっかりはまってしまいました。おいしい餌で魚を誘惑して口に針をかけるのが釣りの一般的な認識ですが、アユ釣りは餌を使わず縄張りをもつアユの習性を利用します。オトリアユの尾っぽ近くに掛かり針をセットし、長いサオを操作して野アユの縄張りに侵入させ、オトリアユを追払うために体当たりしてくる野アユが掛かり針に掛かる仕組みになっています。友釣りと言われる所以はこのためです。オトリアユを自由に動かすために仕掛けが非常に繊細で、器用さも求められ日本人の性格にあった日本独特の釣りです。

アユ釣りは一年中できません。6～10月ころまでが一般です。秋に死んでしまう一年魚であり、冬は川にいません。全国のアユ釣りができる河川は5月末の解禁日は大勢の釣り客でお祭り騒ぎです。釣り人は当然わくわくするのですが、待ち受ける側も、非常にわくわくするそうです。人影のないさびしい過疎の村が賑やかで元気になるからです。この他にも地元がわくわくする理由があります。アユ釣りには入川券が必要です。年間のフリーパス券は、近畿地方では10,500円が相場です。活きの良いオトリも必要です。川沿いにはたくさんのオトリ屋さんが並びます。釣り客相手の民宿も探すのに不自由しません。帰りに立寄る当地の土産を用意した「道の駅」も整備されてきました。私の場合は、地元の名物とアユの塩焼きとで一杯やるのが楽しみになっています。お金を落としてくれるシステムがきっちりとしており地域経済にも役立っているのです。そういうことから地元にとってアユは単に清流のシンボルだけではなく、経済を支える恵みの魚です。みんなの川、宝の川であり、恵みに対する恩返しの考え方が浸透しているため、川にはゴミはあまり落ちていません。

アユの川から、我々の住む都会の川に清流を取り戻すためにはたくさんの恵みをいただける川づくりが必要なことを学びました。水質改善や自然環境の保全を掲げた環境改善活動も大切ですが、もっと多くの人にたくさんの恵みを与えるような仕組みが必要です。といっても簡単にはうまい魚が食えて、お金も落ちる川にはなりません。それに代わる地域が恩返しをしたくなるような魅力ある恵みを探さないと…。

ところで、若者による残虐な事件が後を立ちませんが、これには命を感じる自然体験の不足も大きな要因の一つといわれています。健全な精神を育て、生きる力を育むためには少年期の自然体験が欠かせないとのことです。しかし、都会には身近な自然体験の場が皆無です。そこで、都会の川を「子ども自然体験道場」のようなものに位置づけては…。地域社会にとって子どもたちが健全に育ってくれるほど大きな恵みは他にないと思っています。

平成19年12月1日 船本 浩路